

〔日本書紀神代〕伊弉諾尊、伊弉册尊、立於天浮橋之上、共計曰、底下豈無國歟、迺以天之瓊此瓊玉也、矛指下而探之、是獲滄溟。

〔釋日本紀秘訓〕是獲滄溟、ナハラニエキ

〔延喜式祝詞〕祈年祭略中

奧津御年乎、八束穗能、伊加志穗爾、皇神等能、依奉者略中、青海原住物者、緒能、廣物、緒能、狹物、奧津藻菜、邊津藻菜、至中略、稱辭竟奉、半、

〔萬葉集二十〕二月字〇天平寶十日、於內相〇惠美宅、餞渤海大使、少野田守朝臣等、宴歌一首、

阿乎字奈波良、加是奈美奈妣伎、由久左久佐、都都牟許等、奈久布禰波波夜家無、

右一首、右中辨大伴宿禰家持、未誦之

〔倭訓栞前編四十二〕わた。海をよむは渡る義也、古來山に越といひ、海に渡るといふは套語也、舊事紀及古事記に、多く綿の字をもちう、よて波の白きを比すといへるはあし、

〔書言字考節用集一〕乾坤、廣海又作廣、方便海同、渡津海同、海底喜撰

〔倭訓栞和編四十二〕わたつみ。神代紀に、海、又女童を訓せり、海つ神の義なるべし、〇中海をいふ

も少童より出たり、萬葉集に、渡津海と書れば、渡る海の義とし、わたつみなどよめるは古意に

非ず、又方便海など書り、方便も濟度の意を取にや、一説に、渡津持也、津は助辭、

わたのはら。海の原也、うなはらに同じ、

〔古事記傳五〕師説に、海を和多と云は、渡ると云ことなり、古書に、山には越といひ、海には渡るとい

へり、今云、書紀齊明天皇の大御歌に、萬葉一卷に、對馬乃渡渡中爾などよめるを思へとあり、此外

の説はひがことなり、大綿津見神名義、師説に、綿は海、津は例の助辭、見は毛知の約りたるにて、海

津持てふ意なり、〇中とあり、〔中略〕又師説に、綿津海など書る、綿も海も借字にて、意なし、又わたづ

津持てふ意なり、